

釈尊の葬儀について

宇 治 谷 顕

インドにおける仏教興隆史上において、大乘仏教興起の一要因と考えられる仏塔崇拜はかなり興味ある問題の一つであろう。この問題の考察は、当時のインド一般社会の文化・風潮とのかかわりの中で相対的に考究されるべき性質のものである。かかる視点のうえに、仏塔崇拜の根幹を形成する釈尊の遺物崇拜、特に仏舍利供養 (sarira-pūjā) について、その素因となる、釈尊の遺体が火葬にせられたと伝える文献資料をもとに、その葬法が当時のバラモン社会といかなる関係において実施されるに至ったか、という問題について考察してみたい。

釈尊の遺体は、その葬儀を伝える諸文献一様に火葬を伝受している。しかし、その伝承内容から察するに、その後隆盛をみる仏舍利供養を想定した計画的葬法であったとは信じがたい。一般的には、釈尊の遺体が火葬にせられたのは、当時のアーリアン社会におけるクシャトリア階級の通常の葬法に従ったものとする見解が容認されている。古代インドにおけるアーリアン社会において、ヴェーダ時代にはすでに火葬の風習が見られることは周知の事実である。しかしながら、ヴェーダ時代における火葬儀式の内容は、釈尊の遺体火葬後の具体的な仏舍利供養を伝える仏教諸文献の伝承内容とは相当異なるものである。

ヴェーダ時代における火葬儀式の内容は、その概略次のごとくである。

「死者があると、まず、火葬場が設置される。死体はきれいに清められ、新しい衣を着せられ、両母指は縛られる。ついに死体は牛を連れた行列を引いて葬場へと赴く。葬場は東南に供養火、北西に家主火、南西に布施火、中央に火葬の薪を積んで置き、その上に、祭草と獣皮を敷き、死体を安置する。さらに、牛の臓物で死体を覆い、ついに薪に火が燈される。三つの火の何れが最初に死体に燈るかによって死体の到達する世界が決定される。すなわち、供養火の時は天界に、家主火の時は中界に、布施火の時は人界に、三つの火同時の時は最上の幸福を意味する。

拾骨は死後第十日に行なわれる。特別な取骨器に収納され、墓地に埋葬し、その上に墓標が建立せられる。別れの歌が詠まれ、残った者達は身体を洗い浄める。家の中は不純な火を戸外に捨て去られ、純粋な火が燈される。」

以上のように、ヴェーダ時代における火葬の儀式は、あくまで死者に対する追

慕の供養とは論じ難く、葬儀というバラモン宗教の宗教的祭祀を強調したものである。ヴェーダ文献における葬儀を通して語られる来世の意識は、後のブラーフマナ・ウパニシャッド文献に見られるがごとき、善悪を識別して、それぞれの行為において来世を決定する内容に比較するならば、非常に単純な来世意識ではあるが、総じてバラモン宗教における葬儀の儀式内容には、故人に対する強い追慕の念の高揚と、その追善の供養を想定したものではなかったと考えられてもよからう。

『マヌ法典』2・2・29には、人間の浄潔法としての火葬・収骨の偈頌が記されている。

「再生族のために授胎式等（の浄法）はヴェーダに規定せられた聖儀を以て執行せられねばならぬ。それは身体を清浄にし現世、及び死後における（罪を）払い潔めるものである。」

同じく5・9・58では、

「(子供が) 出歯時又は出歯以前に結髪式（を举行し）又は（入法して）死亡した時は、一切の親族は不浄（となる）、又（子供の）生まれた時も亦同様であるといわれる。」

さらに5・9・62では、

「(或は) 死亡による不浄は一切（のサピンダ親族）に共通するが、誕生によるものは両親にのみある。」

と記している。かかる偈頌から推察するに、バラモン宗教における生・死の観念は、あくまで不浄な行為であり、その不浄は親類縁者すべてに及ぶとされる。その浄潔法として聖火を燈すこと、又は沐浴することを提起している。生への不浄は沐浴により浄化され、死は死体を火葬に葬ることにより浄化されるとした。ヴェーダ時代以前に一般的慣行として行なわれていた埋葬の儀式から、ヴェーダ時代には火葬が一般的葬法となったのは、死の不浄を浄化するという課題が目ざれたものと推考される。

この意味からバラモン社会の火葬は、その後の故人の舍利供養を想定したものとは考えられない。釈尊遺体の火葬は、単にクシャトリヤの葬法儀式に従った行為とされているが、その執行においては、その後の舍利供養を想定した行為なのか、釈尊の葬儀を伝承する諸文献から考察してみたい。

釈尊の葬法を伝える伝承は主として涅槃経類に見出し得られる。『Mahāparinibbāna-suttanta』によれば、阿難の釈尊滅後の葬法についての質問に対し、

「転輪聖王（cakravartin）の遺体の処理する方法で」

と答え、「転輪聖王の葬法とは」の質問に、

「阿難よ、転輪聖王の遺体を新しい布(ahatena vatthena)で包む。新しい布で包んでから、次に打ってほぐされた綿(vihatena kappāsena)で包む。打ってほぐされた綿で包んでから、次に新しい布で包む。このような仕方では、世界を支配する帝王の遺体を五百重に包んで、それから鉄の油槽の中に入れ(ayasāyateladoniyā pakkhipitvā)、他の一つの鉄槽で覆い、あらゆる香料を含む薪の推積を作って、転輪聖王を火葬(jhāpeti)に付する。そして四つ辻(cātumahāpatha)に、転輪聖王の塔(thūpa)を作る。」

と答えている。そして、その塔には花輪(māla)・香料(gandha)・顔料(vaṇṇaka)を捧げて供養すべきである、と伝えている。釈尊の葬法に関しては、他の涅槃経漢訳本等にも一様に「転輪聖王の葬法」を伝えている。

仏教文献における「転輪聖王の葬法」と称する儀式内容は、先に述べたアーリアンの火葬の儀式内容と火葬に葬るまでは、その大筋において同様であろう。しかし、火葬後の舍利供養に関しての説示には大きな隔たりが見られる。その他、仏教文献に伝えられる火葬様式を見ると、『大毘婆沙論』巻第70には、

「後、仏法に於て正信出家せしに、先に著する所の衣、変じて法服となり、五戒を受け已れば、転じて五衣となれり仏法中に於て正行を勸修し、久しからずして便ち阿羅漢果を証し、乃至、最後に般涅槃する時、即ち此の衣をもって身を纏いて火葬せり。」

と伝えているところから見ると、阿羅漢の葬法は火葬が通例であり、仏教徒はこの時期火葬が習慣となっていたことを連想させる。

また、『法顕伝』師子国の条に、

「王は即ち経律を按じて羅漢の法を以て之を葬る。精舎の東四・五里に好き大薪を積むこと縦広三丈余なる可し、高も亦爾く近し、上に栴檀沈水諸香木を著き、四辺に階を作り、上には浄好の白氈を持って周匝して藁を蒙みて大輿床を作る、此の間の輿車に似て俱々竜鬚無き耳、闍維の時に当り、王及び国人四衆は咸集まりて華香を以て供養し、輿に従って墓所に至り、王自ら華香を供養し、供養し訖って、挙げて輿を藁上に著き酥油を以て遍ねく灌ぎ然る、後に之を焼く。火の然る時には、人人敬心に各々上服を脱ぎ及び羽儀傘蓋を遙に火中に擲ち以て闍維を助く。闍維し已って収斂して骨を取り、即ち以て塔を起せり。法顕の至る其の生存に及ばずして唯々葬を見るのみ。」

と伝え、スリランカ上座部における阿羅漢の葬法は火葬であったことを見聞している。その他、『宋雲行紀』于闐巡行の条にも、一般民衆の間で火葬が実施されていたことを伝えている。これらの伝承は、釈尊滅後仏教徒にあっては、葬法儀式は火葬が習慣となり、一般民衆の間で広く実施されていたことを物語るもので

ある。

次に、釈尊において葬儀とは、かつまた故人に対する追善の供養とは、どのように考えられていたのかを考察してみる。『雑阿含経』巻22、純陀経において舍利弗滅後、純陀沙弥が舍利弗の供養を終りし後、その舍利と衣鉢をもちて王舎城に至り、阿難に舍利弗の死を告げ、阿難が釈尊に舍利弗の死去を告げると、釈尊は次のように語っている。

「愛念すべき所の種種適意の事は、皆是別離の法なり。是の故に汝今大いに愁毒すること莫れ。阿難当に知るべし。如来も久しからずして亦た過ぎ去るべし。是の故に阿難、当に自らを燈と作して自らに依るべし。当に法を燈と作して法に依るべし。当に異を燈とせず異に依らざることを作すべし。」

と教えられている。すなわち、それは涅槃経等に説き出される「自燈明・法燈明」の教説である。かかる教説は、舍利弗亡き後、彼の死を悼み、彼の遺骨・衣鉢をもちて供養に従事することは無意義であり、故人の遺物崇拜よりも自らを燈とし、法を燈として学ぶべきことが大切であることを力説するものである。

中村（元）博士は、『中阿含経』巻17・伽弥尼経における釈尊と長者との対話から、(1) バラモン教で行う葬儀の儀礼は無意義である。(2) 人の死後の運命を決定するものは、生前の善悪の行為である。(3) 死後の運命は、釈尊といえども如何ともなし得ない。各人の運命は各人の責任である、の三点を分析しておられる。すなわち、釈尊は死者のための追善の儀式を否定し、原始仏教において葬儀の意義はみとめられていなかったとされる。しかし、葬儀の意義を否認する反面、一方で祖先に対する供養を勧めているのは、葬儀の否認においては各人が行為に対して責任を持つべきこと、祖先に対する供養は感恩報謝の心からなされるものであるから、原始仏教では矛盾と解しなかったのであろう、と論じておられる。

以上、釈尊の葬儀について考察してみたのであるが、釈尊が火葬に葬られたことはバラモン社会の慣習に従ったものと推察され、教義的には、その火葬自体に後世の仏舎利供養を想定するような意図的なものは見あたらない。しかし、尊者を偲ぶという一般民衆の憧憬の念から火葬後仏舎利が珍重され、その供養が一般仏教徒の中で容認されるに至ったものと考えられる。この尊者を偲ぶ憧憬の念が後世、釈尊の神格化とともに釈尊の遺物崇拜・仏舎利崇拜にまで発展し、大乘仏教興起の一要因にまで展開したのではないかと推考せられる。（註省略）

（同朋学園名古屋音楽大学助手）